

埋塚遺跡

1991

滋賀県坂田郡

近江町教育委員会

序

近江町は、豊かな自然環境に恵まれ、その肥沃な土壌の上に今日まで発展して参りました。この度報告いたします「埋塚遺跡」は古墳として周知されてきましたが、今回の調査によって平安時代を中心とした遺跡であることが明らかになりました。

「埋塚遺跡」をはじめ先人の残した数多くの諸遺跡は、近江町の歴史・文化を理解する上で欠くことのできない公共の財産です。これらの貴重な文化財を後世に伝えていくことは現代に生きる我々の責務といえます。

この報告が地域史研究や埋蔵文化財保護への理解と認識を深めるために幾分でも寄与することができれば幸いです。

末筆になりましたが、この調査に御協力いただきました関係諸氏・関係諸機関に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

近江町教育委員会

教育長 木田源三郎

例　　言

1. 本書は、滋賀県坂田郡近江町内における県営灌漑排水事業に伴う埋蔵文化財（埋塚他遺跡）の発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査は平成元年度に実施し、平成2年度に整理調査を実施した。

3. 調査は滋賀県の依頼により、近江町教育委員会が実施した。調査の体制は下記の通りである。

調査主体　近江町教育委員会　　教育長　木田源三郎

調査事務局　近江町教育委員会　社会教育課　課長　須戸　茂樹

係長　世森　増信

主任　宮崎　幹也

調査補助員　南　孝雄（現・京都市埋蔵文化財研究所）

中川治美（中京大学学生）、橋本和恵（滋賀大学学生）

整理作業員　広瀬清左エ門、広瀬長吾、村岡勝次、北居憲治、近藤喜美子

吉井靖子、小原八重子

4. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言を得た。記して厚く感謝のを表する次第である。

江谷　寛、古野四郎、柏淵宏昭、高橋克壽、用川政晴、中川通士、田路正幸

中井　均、高居芳美、古川　登、中村健二、前川佳世（順不同、敬称略）

5. 発掘調査および整理調査にあたっては下記の団体の協力を得た、記して謝意を表する。
金城測量設計株式会社（基準点測量）、小川工務店（発掘機械）、滋賀建機サービス有限公司（調査器材）、有限会社真陽社（報告書）

6. 本書で使用した方位は新平面直角座標系VIIによった。また標高はTP（東京溝平均海面高度）を用いた。

7. 本書の執筆・編集は宮崎幹也がおこなった。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 埋塚遺跡の調査（第1次調査）.....	5
第4章 浄蓮寺遺跡の調査（第1次調査）.....	11
第5章 高溝遺跡の調査（第2次調査）.....	16
第6章 顔戸遺跡の調査（第2次調査）.....	21
第7章 塚の越古墳の調査（第2次調査）.....	28
第8章 ま と め	29

挿 図 目 次

第1図 調査位置図(S = 1 : 50,000).....	2
第2図 調査遺跡位置図.....	4
第3図 埋塚遺跡調査位置図.....	6
第4図 埋塚遺跡遺構図.....	7
第5図 埋塚遺跡出土遺物.....	8
第6図 埋塚遺跡出土石製品.....	9
第7図 埋塚遺跡概念図.....	10
第8図 浄蓮寺遺跡調査位置図.....	12
第9図 浄蓮寺遺跡調査区平面図.....	13
第10図 浄蓮寺遺跡出土遺物(1).....	14
第11図 浄蓮寺遺跡出土遺物(2).....	15
第12図 浄蓮寺遺跡出土遺物(3).....	15
第13図 高溝遺跡調査区位置図.....	17
第14図 高溝遺跡出土遺物(1).....	18

第15図	高溝遺跡出土遺物(2).....	19
第16図	顔戸遺跡調査地位置図.....	21
第17図	第1トレンチ～第4トレンチ平面図.....	22
第18図	第5トレンチ・第6トレンチ平面図.....	23
第19図	第7トレンチ検出遺構.....	24
第20図	第10トレンチ平面図.....	25
第21図	法勝寺遺跡出土遺物.....	25
第22図	顔戸遺跡出土遺物.....	26
第23図	塚の越古墳調査地位置図.....	28

図 版 目 次

- 図版1 (上) 埋塚遺跡調査前状況 (下) 埋塚遺跡調査風景
- 図版2 (上) 埋塚遺跡第1トレンチ (下) 埋塚遺跡第4トレンチ
- 図版3 (上) 浄蓮寺遺跡全景 (下) 浄蓮寺遺跡検出遺構
- 図版4 高溝遺跡検出条里畦畔遺構
- 図版5 (上) 高溝遺跡条里畦畔遺構 (下) 高溝遺跡条里畦畔断面
- 図版6 高溝遺跡条里小畦畔
- 図版7 (上) 高溝遺跡小畦畔と里道 (下) 高溝遺跡検出遺構
- 図版8 (上) 顔戸遺跡全景 (下) 顔戸遺跡近景
- 図版9 (上) 顔戸遺跡竪穴住居 (下) 顔戸遺跡掘立柱建物
- 図版10 (上) 顔戸遺跡大溝 (下) 顔戸遺跡大溝断面
- 図版11 (上) 顔戸遺跡第12トレンチ (下) 顔戸遺跡土壤
- 図版12 (上) 顔戸遺跡第1トレンチ (下) 顔戸遺跡第9トレンチ
- 図版13 塚の越古墳検出遺構
- 図版14 (上) 塚の越古墳南面 (下) 塚の越古墳北面
- 図版15 埋塚遺跡出土遺物
- 図版16 埋塚遺跡・高溝遺跡出土遺物
- 図版17 埋塚遺跡出土遺物・高溝遺跡出土遺物
- 図版18 浄蓮寺遺跡出土遺物
- 図版19 高溝出土遺物
- 図版20 高溝遺跡出土遺物

第1章 はじめに

埋塚遺跡は「うめづかいせき」と呼称し、滋賀県坂田郡近江町顔戸に所在する複合遺跡である。当遺跡のある「近江町」は琵琶湖の北東部に存在し、JR東海道新幹線「米原駅」の北東側に拡がる面積の小規模の町ながら、古代よりの交通の要衝として栄え数多くの遺跡の存在が知られている。

ここに報告する埋塚遺跡は、町の中心にある集落「顔戸」の南方水田地帯に所在しており、一級河川「天野川」の右岸に位置する。埋塚遺跡の周辺には弥生時代後期から古墳時代中期におよぶ時期の遺跡が多く知られている。まず埋塚遺跡の北方4kmには100基以上の方形周溝墓がこれまでに調査されている「法勝寺遺跡」があり、南方1kmには内部に円形低墳丘墓をはじめ数基の墳墓を含む環濠集落「西円寺遺跡」が隣接する。

ここに報告する埋塚遺跡は古くから周知されていた遺跡ではなく、昭和61年度の分布調査時に新たに周知された遺跡であり、周知範囲内の畠地を中心として、須恵器等の遺物の散布が認められ、古墳として周知されている。滋賀県の湖北地域の平野部には「つか」と呼ばれ、古墳と周知されながら、発掘調査によって別の性格をもつ遺構であると判明した遺跡が多く分布しており、この埋塚遺跡に対しても古墳と考える向きと、「つか」と呼ばれる別個の性格の遺構と考える向きがあった。また分布調査によって発見された散布遺物中の須恵器には幅広い年代観が認められ、遺跡の性格付けを一層複雑化させていた。

今般、滋賀県農林部による県営灌漑排水整備事業が実施されるにあたり、埋塚遺跡をはじめ、淨蓮寺遺跡・高溝遺跡・顔戸遺跡・塚の越古墳等に発掘調査の必要が生じた。これらの事業は、県営は場整備事業の面工事およびバイオライン工事と平行して実施されたため、関係遺跡の発掘調査は、経費区分をもちながら同時に実施することとなった。したがって、調査の一部が県営灌漑排水事業に関連したものは全て、当報告の中で取り扱った。

なお、今回ここに報告をする調査を厳密に細分すると、以下のをおりとなる。

- ①埋塚遺跡 第1次調査（弥生時代前期から平安時代後期に及ぶ複合遺跡北端部の調査。）
- ②淨蓮寺遺跡第1次調査（平野に位置する中世寺院関連遺跡。遺跡の北端部を調査。）
- ③高溝遺跡 第2次調査（遺跡の中心を南北に調査。条里施行過程の遺構を調査。）
- ④顔戸遺跡 第2次調査（遺跡の南東部を調査。古墳時代の環濠を再び追及調査。）
- ⑤塚の越古墳第2次調査（周知される古墳の東側で、後円部の拡がりを追及調査。）



第1図 調査地位置図 ($S=1:50,000$)

($S=1:10,000$)

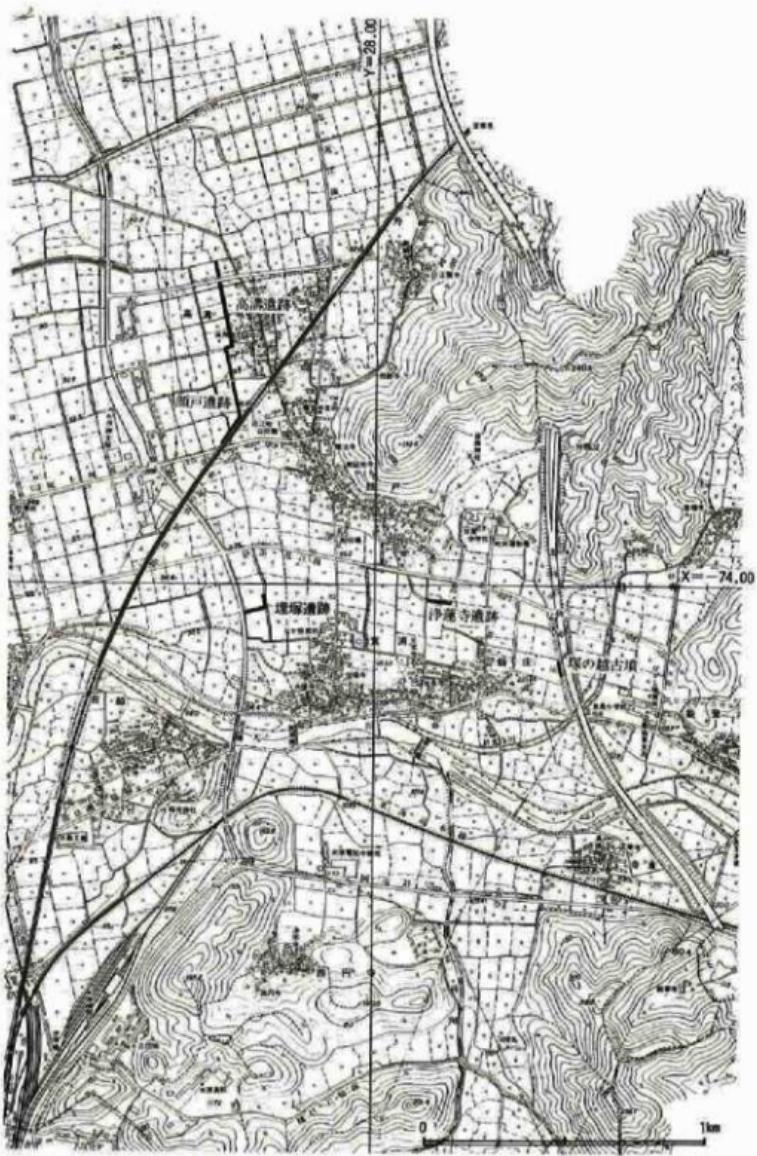
第2章 遺跡の位置と環境

坪塚遺跡は、琵琶湖の北東部にある近江町額戸に所在する。遺跡は、一級河川「天野川」の右岸に位置し、河口の琵琶湖まで約4kmの距離を保つ。遺跡の北側には長浜市の東部を占める横山丘陵が控えており、同丘陵の再南端を形成する。この横山丘陵の北側には「緋川」が流れ、丘陵の最北端には5世紀中葉に位置付けられる「茶臼山古墳」を初めとした坂田古墳群が形成される。これに対し丘陵の最南端では、6世紀前半に位置付けられる「塚の越古墳」・「山津照神社古墳」を初めとした息長古墳群が形成される。これら琵琶湖北東部における二大古墳群については、近江の古代豪族を語る上で再三紹介されてきている。このうち南側に位置する息長古墳群については、これまで坂田古墳群に後出する古墳群として理解されてきたが、近年の周辺遺跡の発掘調査成果を踏まえて再度これらの古墳群の理解について整理してみたい。

息長古墳群では、先の横山丘陵最南端の丘陵尾根筋に初現の古墳が認められる。古墳は、尾根の西寄りに独立する「日撫山古墳」と、東寄りに群構成をもつ「定納古墳群」によって構成される。日撫山古墳は、昭和62年度の近江町内遺跡分布調査のおりに墳丘測量調査が実施されており、長辺15m・短辺13mを測る長方形墳であると理解されている。また定納古墳群は、昭和47年度の滋賀大学考古学研究室の分布調査によって、尾根上に連立する12基の古墳が紹介されている。

これらの丘陵上部の前期古墳に対し、丘陵裾の平野部には弥生時代から低墳丘墓（方形周溝墓）の盛んな構築が認められる。法勝寺遺跡に残るこれらの群域では、弥生時代後期に大形方形周溝墓や前方後方形周溝墓を核とする支群構成が認められ、次いで弥生時代後期から古墳時代中期に至る環濠集落西円寺遺跡では、独立した円形低墳丘墓（3世紀末葉）・帆立貝形低墳丘墓（5世紀末葉）などが認められる。これらの平地の低墳丘墓には、墳墓への円形平面の採用が認められる（3世紀末葉）ほか、円筒埴輪の開始時期については、近江町内では、西円寺第3号低墳丘墓が最も古く、隣接する米原町大乾古墳群内の埋没古墳と等しい時期にあたる。

丘陵尾根部に構築された古墳は、次第に丘陵下方へ移行するが、平地に立地する古墳は、6世紀初頭の前方後円墳「塚の越古墳」に限られ、他の古墳は、丘陵上に立地した状態で後期に統く。塚の越古墳は主軸を東西方向に持ち、側面觀を利用した南面重視の構造を示している。これら構造差の顕著な箇所としては、周濠規模・葺石・埴輪列等が挙げられ、この他に石室（横穴式石室）の開口方向が加えられる。6世紀中葉以降の古墳で丘陵上に



第2図 調査遺跡位置図

残るものとしては、山津照神社古墳・人塚山古墳・黄牛塚古墳などが知られる。

一方さきほどの平地の低墳丘墓に続くものとしては、高溝の狐塚5号墳を初めとする狐塚古墳群が挙げられる。狐塚5号墳は、同古墳群内唯一の帆立貝形プランを呈しており、豊富な器材埴輪（家形埴輪・太刀形埴輪・盾形埴輪など）と人物埴輪・動物埴輪の出土が知られる。これに続く円墳（狐塚1号墳等）にも埴輪の出土が認められるが、出土量では、狐塚5号墳が卓絶している。

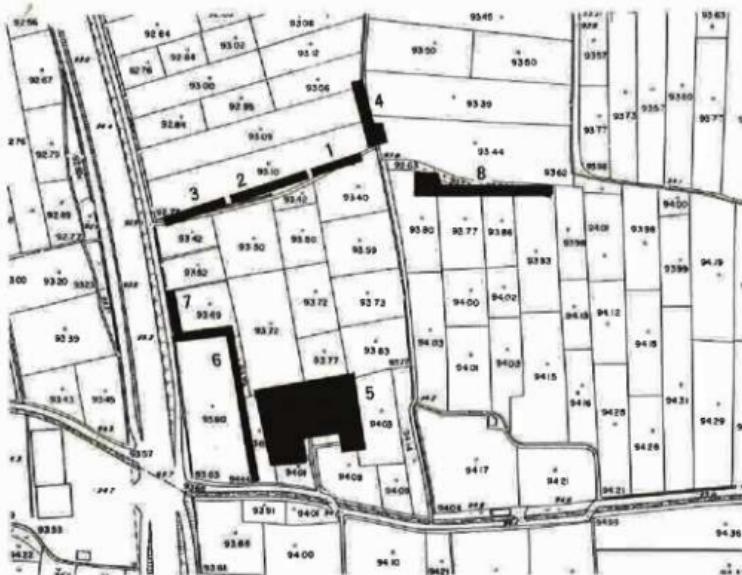
從来古墳として規定されてきた概念には、弥生時代以降続く墳墓形態を理由づける定義に問題が残されており、ここでは、現状で墳丘の無いもの、周濠規模の虚弱なもの、周濠部に土器供獻の認められるもの等の3要素が備わった検出構造を「低墳丘墓」として取り扱った。これは必ずしも古墳と別個に分類されるべきものではないが、弥生時代から古墳時代への墳墓構造の変遷を語る上での一時的分類用語として使用している。この分類に従うと、横山丘陵の最南部を中心として、西方の法勝寺遺跡（3世紀後葉）・南方の西円寺遺跡（3世紀末葉～5世紀末葉）・西方の狐塚古墳群（6世紀前葉）に平地の低墳丘墓が構築され、丘陵の上部では、日撫山古墳・定納古墳群（4世紀）・後別当古墳（5世紀後葉）が築かれ、平地の塚の越古墳（6世紀初頭）を経て、再び丘陵上に山津照神社古墳（6世紀中葉）・黄牛塚古墳・人塚山古墳（6世紀後葉）が古墳として構築されている。

以上のことから、先行する低墳丘墓の構築が、古墳時代中期に至るまで継続していることが理解されよう。これら的一部については、旧來「埋没古墳」という言葉で処理されることが多かった。これら低墳丘墓の分布を長古墳群の変遷要素に加えると、從来から指摘されてきた構成年代の理解に疑問が生じるのである。

第3章 埋塚遺跡の調査（埋塚遺跡第1次調査）

（1）調査以前に知られていたこと

埋塚遺跡は、1987年に近江町教育委員会より発行された『近江町文化財調査報告書』の中に初見する遺跡で、昭和60・61年度に実施された分布調査で発見された遺跡である。同報告書によると大字箕浦字坊の西・替添から大字額戸字埋塚・東埋塚にかけてを中心とし、平安時代後期の灰釉陶器・土師器等の散布状況が知られている他、「地面の上に立つと“トントン”と鳴ったという伝承があり、地下が空洞になっていたようである。時期はよくわからないが、古墳の石室ではないだろうか。」と紹介されている。確かに小字「埋塚」は周辺の水田より約60cm程高くなつた畠地であり、上部が平坦であるものの、平面の形状から前方後円墳に復原される向きもあり、古墳と理解されても不思議ではない状況であった。

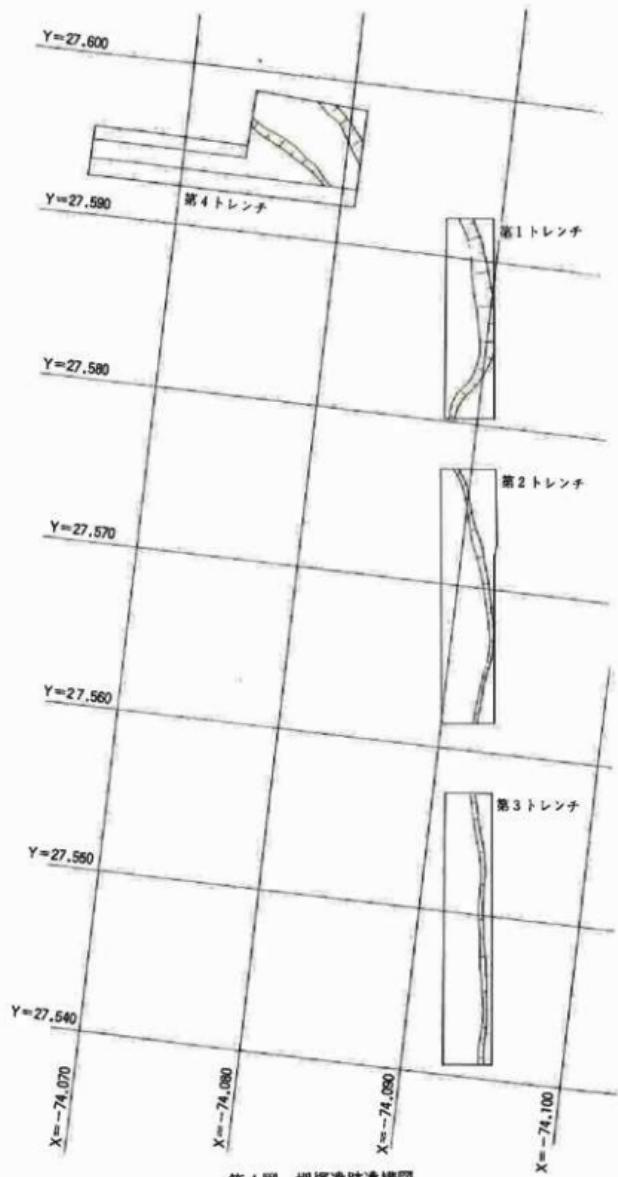


第3図 埋塚道路調査位置図

埋塚遺跡については、これまでに二度におよぶ試掘調査例がある。これらの調査は、いずれも遺跡の西半部を対象としており、昭和63年度に実施されている。初めの調査は、県営ほ場整備に関連した調査で、遺跡周知範囲の東半部では何等遺跡の存在を証明する資料は得られなかった。また2度目の調査は、農家住宅建設に伴う調査で、遺跡周知範囲の中央部で、掘立柱建物を構成する柱穴が発見されている。これらの調査では、遺跡の西半部が、青灰色の粘土を基盤層としていることが明らかになり、幾分低湿な地盤であることが明らかになった。

これらの試掘調査では、遺跡の実態について不明な点を多く残してきたが、今回の調査と、平成元年度に実施された第2次調査によって埋塚遺跡が弥生時代前期から平安時代後期にいたる複合遺跡であることが判明した。第2次調査の調査結果については、「近江町文化財調査報告書第9集 埋塚遺跡2」に掲載しており、その中で同遺跡の変遷を第Ⅰ期（弥生時代前期）・第Ⅱ期（弥生時代後期）・第Ⅲ期（古墳時代中期）・第Ⅳ期（平安時代前期）・第Ⅴ期（平安時代前期）の計5時期におよぶものと判断した。

今回報告する第1次調査の成果についても、第2次調査の時期区分に全て収まるため、第Ⅰ期～第Ⅴ期の分類をそのまま適応し報告するものである。



第4図 埋塚遺跡構造図

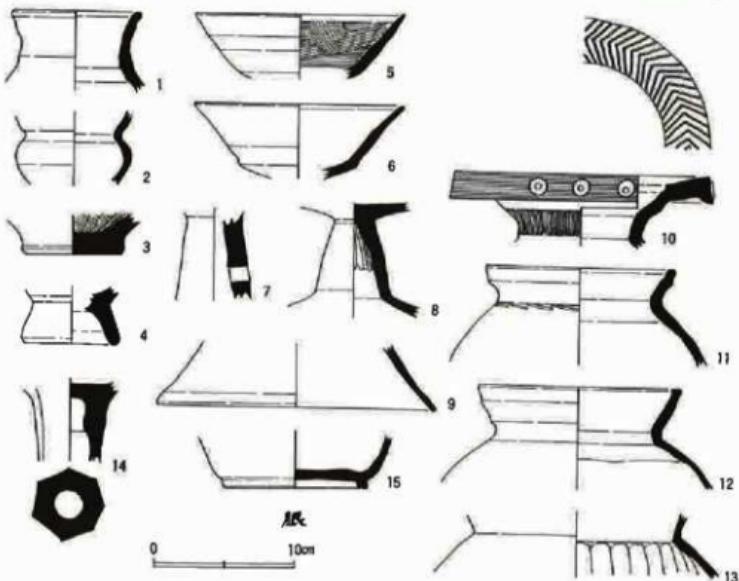
(2) 調査の結果

発掘調査の対象となったのは、埋塚遺跡の周知範囲北端にあたる。調査時点での地形は、この箇所を境にして北側が一段低くなってしまっており、境界箇所を東側から第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチとした。また第1トレンチの北側に第4トレンチを設定したため、調査箇所は、横向けのL字型を呈することになった。

第1トレンチから第3トレンチにかけては、落ちこみ状の遺構が検出された。これは人工的な遺構では無く、自然地形を示すことが判明したが、その埋土内には遺物の包含が認められる。また、この自然地形の落ちこみ基底部を第4トレンチで追求したところ溝状の落ちこみが確認され、第5図に示す遺物が出土した。

遺物の多くは、溝状遺構の基底部から出土したが、(10)のみトレンチ堆積土の中程から出土した。(10)は弥生式土器の壺で、口縁部の内側に段を持ち、その外方部上面に二重の刺突列点文を巡らせている。また、段より下方については赤色顔料が塗られている。

溝状遺構の基底部より出土した遺物には弥生式土器・古式土器・土師器・須恵器等がある。弥生式土器には壺(1)と(3)がある。(1)は直立気味に外反する口縁部を尾する壺で、小形のタイプに属する。また(3)は平底の底部で、内面にハケを残す。遺物は埋塚遺跡第II期



第5図 埋塚遺跡出土遺物

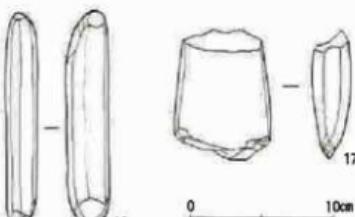
に該当する。

古式土器には、小形壺(2)・脚台(4)・高杯(5~9)・甕(11~12)がある。小形丸底壺や口縁上端部が肥厚する甕の形状からこれらの土器は、布留式土器併行期の土器と考えられ、埋塚遺跡第III期に該当するか、もしくはこれに先行する時期と判断される。

土器には、高杯の脚部10がある。外面を八面取されたこの高杯は第2次調査においても出土しており、大形掘立柱建物が出現する埋塚遺跡第IV期に該当する。また須恵器の杯19もこの時期に該当し、底部に墨書きが認められる。

第4トレンチの溝状遺構からは、この他に石製品の出土が認められる。16は小形の石棒、18は磨製石斧である。

これらの遺物は、埋塚遺跡第I期もしくは、それ以前のものと考えられ、同時に出土した他の石製品から縄文時代の遺物となる可能性が存在する。



第6図 埋塚遺跡出土石製品

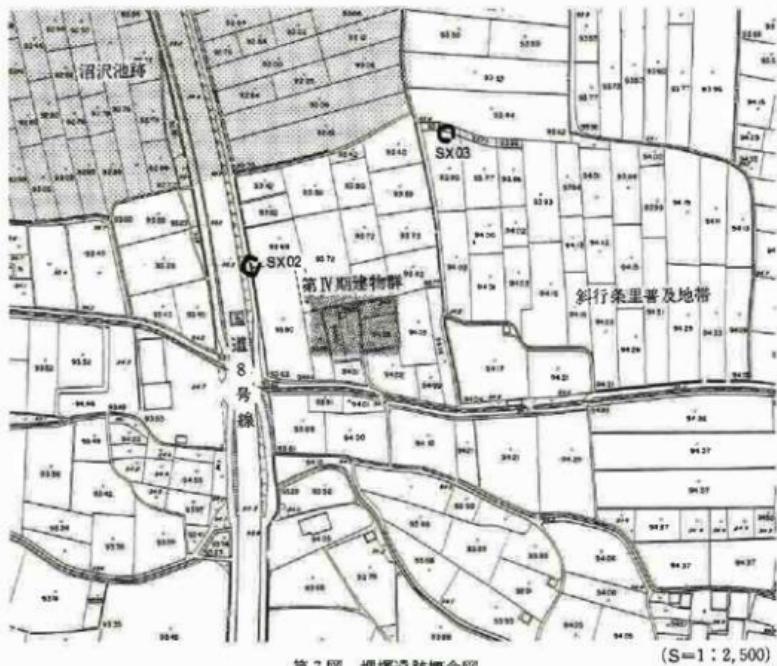
(3) 調査から理解できたこと

ここに報告する埋塚遺跡第1次調査は、別報告した第2次調査とはほぼ同時に実施したため、両調査から一度に理解された事実が多い。これによると遺跡は、約5回の画期をもつ複合遺跡で、弥生時代前期（第I期）・同後期（第II期）・古墳時代中期（第III期）・平安時代前期（第IV期）・同後期（第V期）に様々な性格の遺跡となっている。

これらのうち、第I期の遺跡については、縄文晩期の遺跡と併合しているのか、或いは独立しているのかを含め不明な点が多い。また第II期の遺跡については、第7図に示したとおり北西側に大きな沼沢地を有しており、その縁辺に方形周溝墓の分布が確認されている。図上S X02・S X03と記されているものが方形周溝墓で、第2次調査において検出された。この2基の遺構の間には、未確認の同種遺構が併存していると推測される。沼沢地の縁辺に方形周溝墓が構築されることは、弥生時代中期から後期にかけて多く認められる一般的な傾向であり、滋賀県下の方形周溝墓の一要素である。

また、この沼沢地の北対岸に当たる位置にも、同時期の方形周溝墓群が存在することが平成2年度の長門寺遺跡発掘調査から明らかになっている。両遺跡の検出遺構は南北に並んだ状態にあり、約700mの距離を保っている。

埋塚遺跡の検出遺構のうちで最も大がかりなものは、第IV期の大形掘立柱建物群であり、沼沢地の南60mに位置する。コの字形配列を示すこれらの遺構は、東側に拡がる斜行条里



第7図 埋塚遺跡概念図

(S=1:2,500)

の東西基準線と併合する主軸をもつことから、斜行条里の開発および管理に関連した建物と理解されている。斜行条里の開発時には、大がかりな土木工事が実施されており、沼沢地の埋設も、この時期に活発に行われたと推測される。

今回の報告に現われた自然地形の落ちこみは、この旧沼沢地の縁辺を示すもので、第IV期の開発時に今回の出土遺物が、混在したものと判断される。すなわち埋塚遺跡第1次調査では斜行条里等の開発が示す上木工事規模が明らかにされ、周辺の遺跡の複合形態と開発による遺物の混在形態が明らかになった。

第4章 浄蓮寺遺跡の調査（浄蓮寺第1次調査）

（1）調査以前に知られていたこと

浄蓮寺遺跡は、中世の寺院跡として周知される遺跡である。大字新庄の集落北側に隣接した形で、大字顔戸浄蓮寺と呼ばれる水田地帯が残されており、同時に中世陶磁器の散布状況が認められることから、この地を中世寺院跡として周知されるに至ったようである。平成元年度に試掘調査が実施されるまで、同遺跡の実態については、全く不明であったが、この調査によって、箕浦城（新庄城）遺跡と浄蓮寺遺跡という2つの中世遺跡の存在が再認識されるにいたった。

箕浦城遺跡については、同年度に滋賀県教育委員会と財團法人滋賀県文化財保護協会によって発掘調査が実施され、平地に築かれた館跡関係の遺構が確認されている。浄蓮寺遺跡は、この箕浦城遺跡の北側に隣接する状態で位置しており、先の試掘調査では南北400m・東西300mの範囲に遺跡の存在が確認されている。この試掘調査では、多くの遺構が確認されたが、その後の工事計画の変更から、遺跡の中心部については保護策が講じられたため、遺跡の最北端と最南端の2箇所で調査が実施されることになった。

浄蓮寺遺跡の最南端の調査は、先の箕浦城遺跡の調査とともに滋賀県教育委員会と財團法人滋賀県文化財保護協会によって実施され、縄文時代後期の甕棺墓・飛鳥時代の区画溝と共に中世遺跡に関連した遺構が確認されている。

（2）調査の結果

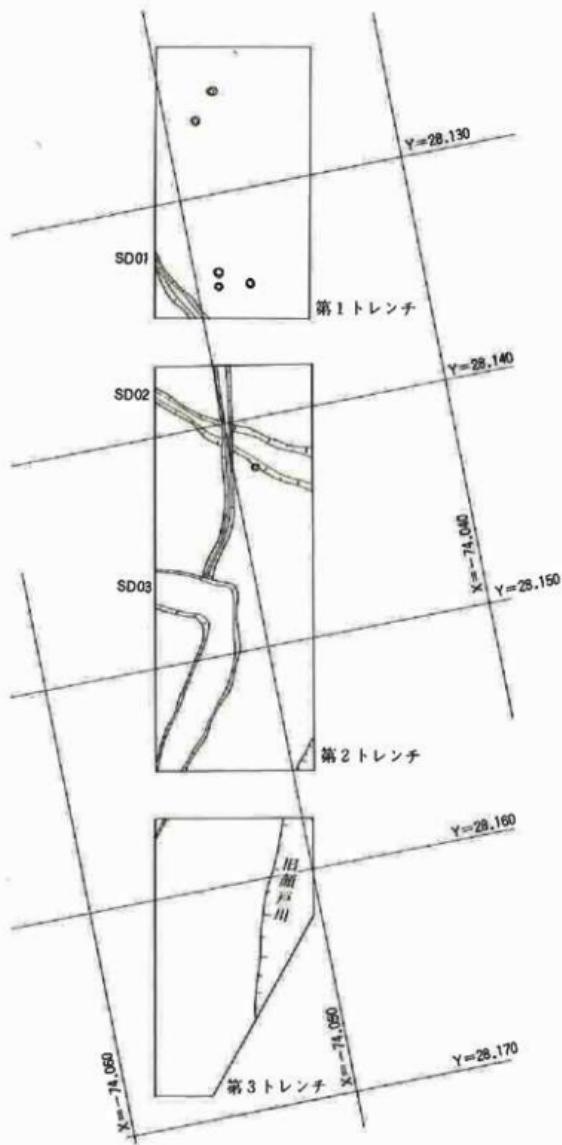
ここに報告する浄蓮寺遺跡第1次調査は、近江町教育委員会が同遺跡最北端で実施したものである。調査地は現在水田となっているが、旧来「顔戸川」と呼ばれる河川が流れていたところで、水田地割に乱れが残されている。調査地の北側にある双葉中学校付近には、稗田遺跡・安養寺遺跡などの遺跡が集中しているが、これらの遺跡は、顔戸川を境界として南側への拡がりを見せない。

調査箇所は、南北7m・東西50mの範囲を3分割し、西側から順に第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチとした。これらの遺跡で検出した遺構は三条の溝遺構と旧顔戸川の埋込みであった。検出した溝は、遺構の重層関係からSD02・SD01・SD03の構築順序が明らかになっている。各遺構の規模は、SD02が幅50cm～150cm・深さ20cm、SD01が幅20cm～50cm・深さ20cm、SD03が幅150cm～180cm・深さ25cmをそれぞれ測る。これらの遺構内からは具体的な遺物の出土は認められなかったが、第3トレンチの北端で検出した

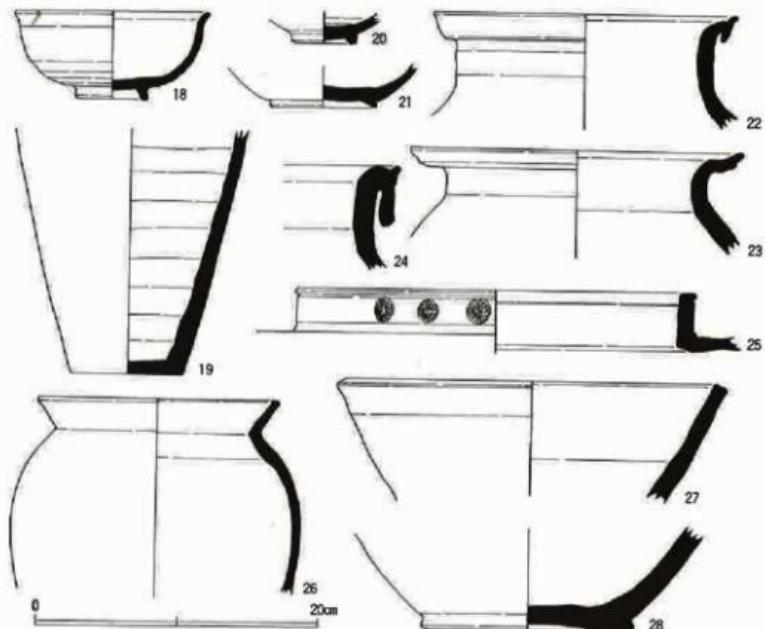


第8図　淨蓮寺遺跡調査地位置図

(S=1:2,000)



第9図 淨蓮寺遺跡調査区平面図



第10図 淨蓮寺遺跡出土遺物(1)

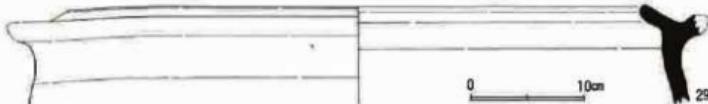
旧額戸川の内部からは、中世陶磁器の出土をみた。これは同河川の埋廻作業に南側の淨蓮寺遺跡内の土砂が使用されたことに関連しており、二次堆積による遺物の出土となった。

出土した遺物は、碗を除き中世の陶磁器である。18は口径16.5cmを測る土師器の甕である。口縁上端部に肥厚した箇所もなく、やや縱長の体部を伴う甕と思われる。

19は陶器の椀、半球形の体部の下半は鋭くヘラ削りされる。(19)は双耳壺の底部と思われる。水平な底部が特徴である。(20・21)は椀の底部。(22・23・24)は甕の口縁部。(25)は受口状口縁を呈しており、(22・24)はN字形口縁部を呈している。

18は瓦質土器。短く直立する口縁部の外周に菊花文が押圧される。(27・28)は擂鉢の口縁部および底部である。

これらの遺物は、国内産の陶磁器および瓦質土器である。小形の製品については、美濃・瀬戸系のもの、大形の製品については、常滑・越前系のものが含まれている。滋賀県内における越前系土器の出土は、湖北地域と湖西地域に集中して多く、同様の傾向を示している。



第11図 淨蓮寺遺跡出土遺物(2)

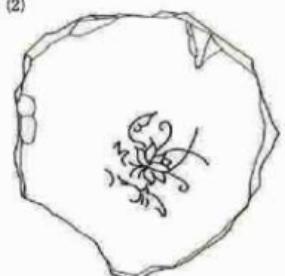
この他の遺物として大形の瓦質土器の羽釜(ふく)がある。口径51.0cmを測る大形の羽釜であり、一般集落から出土することは少ない。

また陶は、淨蓮寺遺跡から出土した唯一の輸入磁器(青磁)の椀である。上部を欠損しているため、全体の大きさは不明であるが、高台径が5.2cmを測り、大形の製品と思われる。見込みの部分にはスタンプが押され、底部の中心には「上」の墨書きが残されている。

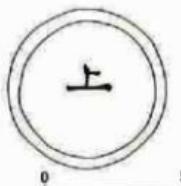
(3) 調査から理解できたこと

今回の調査では、淨蓮寺遺跡の最北端部を発掘調査した。先に記したとおり同遺跡の中心部については、水田下に現状保存されており、実態は不明である。しかしながら、その分布規模から推察して固有の寺院のみを限る範囲と判断できるものではない。現状の地形は、遺跡の中心部がわずかに高くなっているが、旧額戸川の堆積に認められるように、旧地形にいくらかの削平行為が想定されるため、本来の遺跡中心部は、さらに高い地形を呈していたと想定される。

遺跡は箕浦城遺跡の北側に隣接する寺院を中心とした中世集落と想定されるが、今回出土した遺物は、一般集落に付随する遺物でなく、むしろ寺院跡からの出土遺物に近い傾向を残している。



第12図 淨蓮寺遺跡出土遺物(3)



第5章 高溝遺跡の調査（高溝遺跡第2次調査）

（1）調査以前に知っていたこと

高溝遺跡は、近江町大字高溝の集落西側に位置する複合遺跡である。遺跡の中心となる時代は縄文時代であり、前期から晩期に至る各時期の遺物が、これまでに紹介されている。遺跡の存在は、町内の遺跡の中で最も古くから知られており、町内高溝在住の柏瀬辰次氏の表探資料が幾度か紹介されている。この採集資料は、湖北地域の縄文時代資料として古くより注目されてきた。

高溝遺跡については、昭和61年度に発掘調査が実施され、宇ニエダ地区と宇高溝大井地区が対象となった。したがって、この時点の調査を第1次調査とし、今回の調査を第2次調査とする。第1次調査では、この遺跡が広義の「顔戸遺跡群」に含まれることを明らかにし、縄文時代以降には、弥生時代終末期から古墳時代中期に至る環濠集落遺跡を形成することが判明した。古墳時代の環濠の痕跡は、平安時代後期までの条里施行によって埋めも戻されており、この際、周辺の土と共に縄文時代の土器や石器が、古墳時代や平安時代の遺物と混在した形で環濠内に二次堆積し、出土遺物の複雑な状況を生み出していた。

第1次調査は、高溝遺跡周知範囲の南端に該当したが、今回の第2次調査は、遺跡の南北約400mを縦断する形で実施した。

第1次調査の調査内容については、既に『近江町文化財調査報告書4集 高溝遺跡』の中で述べたとおりであるが、高溝遺跡の本質は条里景観内に位置する複合遺跡であり、条里の施行・性格を知る上で最も良質な遺跡という点である。今回の第2次調査においても調査区が条里坪境にあたる位置も多く、条里制の工事実態を知る恵まれた機会とされる。

（2）調査の結果

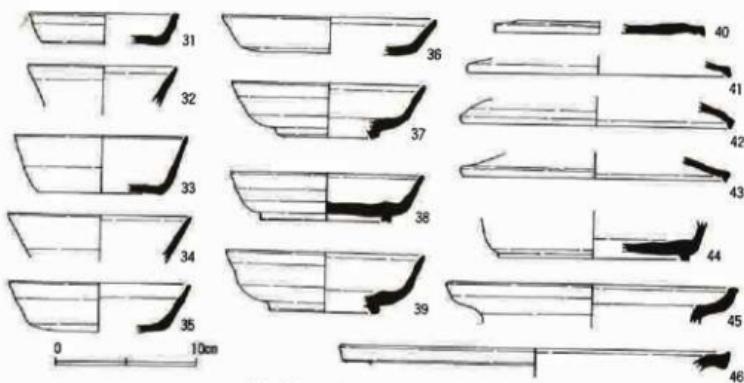
調査区については五分割し、北側より第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチ、第4トレンチ、第5トレンチと呼称した。第1トレンチは、北の端を法勝寺遺跡と隣接している。第1トレンチの調査では、遺構面上層より遺物の出土が目立ち始め、遺構面検出時には調査区中央に緩やかな落ちこみ状の窪みを検出した。この窪みの埋土からは平安時代前期の七器が出土し、遺構面上の整地行為を明らかにした。

第14図に載せた遺物は、第1トレンチ中央部の窪みを埋めた時期を記すものである。出土遺物は、須恵器と土師器で構成される。

（31～36）は高台を持たない須恵器の杯である。口径が10.5cm前後の小形のもの33、13.0



第13図 高溝遺跡調査区位置図



第14図 高満遺跡出土遺物(1)

cm前後の中形のもの(31・33・34・35)、15.0cm前後のやや大形のものなどがあり、全体に斜め上方に直線的に伸びる口縁部を特徴とする。

(37~39・44)は高台を持つ須恵器の杯である。口径が14.0cm前後のもの(37~39)と、さらに大きいもの(44)がある。いずれも器高が低く、底部に対して高台径が小さめな点が特徴である。

(40~43)は高台を持つ須恵器の杯とセットにある杯蓋。天井部の水平なもの(40)と、傘状に張りのあるもの(41~43)がある。

(48)は土師器の甕。受口状口縁が外側に大きく開いている。

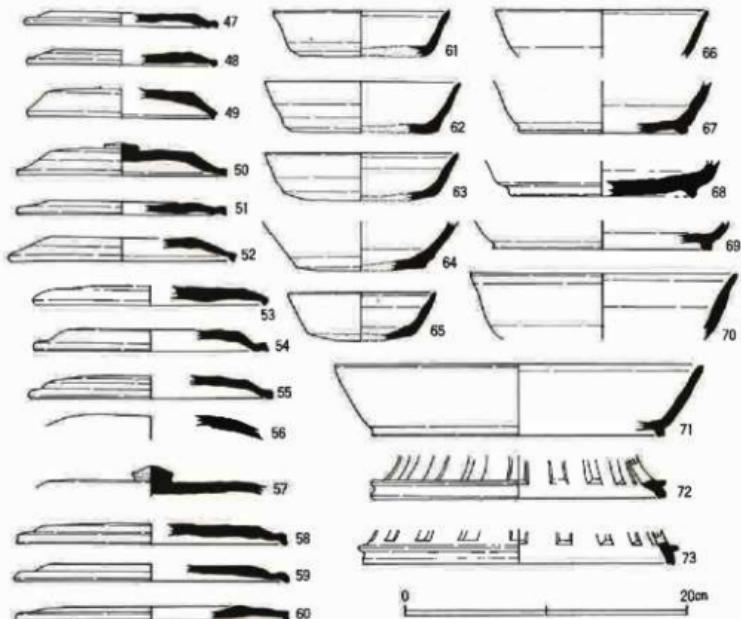
これらの土器は、深み埋土中の最上層から出土した。出土状態に一括性があるものの、構成する中に完形品が無い点から、埴みを埋める際に廃棄された土器片と理される。

深みを整地した遺構面には、柱穴を掘り込んだ箇所があり、上記の出土遺物と年代観の類似する須恵器の杯輪が出土した。このため、深みを整地した後、新たな建物が構築されるまでの時間差は短いと推測される。

第15図に記した土器は、第1トレントの包含層中から出土した遺物である。杯蓋(47~60)、高台を持たない杯(61~64・66)、高台を持つ杯(66~71)、さらに円面鏡(72・73)がある。杯蓋は、平均して天井部の水平なものが多く、高台を持つ杯には口径26.0cm前後の大きなものも含まれる。杯の傾向としては、先に掲げた埴み出土の遺物と同様に器高の低い点を特徴としている。

円面鏡は、経部の異なるものが2点(72・73)出土している。いずれも10方に方形の透しを持つと復原される。

第2トレントでは、現存する里道に合わせて要所で屈折させながら調査区を設定した。



第15図 高溝遺跡出土遺物(2)

その結果、同トレンチの南北部において調査区のはば主軸上に「条里畦畔」を検出した。ここで検出した畦畔は、景観条里方位に合わせて直線的な伸びを示しており、トレンチの北部では、調査区の東側にはずれる結果となった。これによって、地理上の条里遺構と考古学での条里畦畔遺構が必ずしも合致しないことが証明された。

また第3トレンチでは、先の条里畦畔遺構の延長を再検出し、さらに直交する小畦畔の遺構を検出した。この小畦畔の遺構は、約10m60cm間隔で検出され、一町四方の条里坪区画を一辺で10等分しているものと予想された。

最後に第5トレンチでは、第1次調査の高溝大井地区の東側で、環濠遺構の延長を確認し、その埋上内部から縄文式土器・石器・古式土師器・山茶碗等の出土をみた。これは第1次調査において確認された、条里施行期の埋設工事を示すものと等しい状況であった。

(3) 調査から理解できたこと

今回の高溝調査第2次調査の中で、縄文時代および古墳時代の資料については、前回の資料以上に明確な物は無く、むしろ調査の主眼は、条里施行に伴う地形の平坦化と畦畔の

構築に向けられた。

第1トレンチで確認された窪みの平坦化は、水田開発や管理建物の構築に際して実施された行為と理解され、出土した遺物の年代観から平安時代前期の作業と想定される。この際に構築された畦畔は、調査トレンチの東側に平行した形で隣接しているものと考えられ、南方に続く第2トレンチ・第3トレンチの検出畦畔遺構に統くと推測される。

これら条里施行期に構築された畦畔は、基底部の幅が150cm前後・高さ60cmを測る構造規模の大きなものであった。他の遺跡から検出される畦畔遺構の多くには、上部の削平されたものが多いが、今回検出した遺構は、現状が里道と一部重複していたため、上部の遺存状況が良好であった。

検出された畦畔遺構は、景観条里の主軸方位に合致して直線的な伸びを示しており、むしろ現在「条里景観」を構成する里道（地理上の条里遺構）の方が、不安定な伸びを示していることが理解できよう。

また第3トレンチで検出した主軸に直交した小畦畔の伸びは、現在の高溝集落内の里道位置と重複しており、現存する集落の里道規制要素が、条里区画に求められることが明らかになった。

高溝では集落の基盤標高と条里遺構の標高に約150cmの開きがあり、平野部の中の限られた微高地に開発された初期集落が、集落構成要員の増大にともなって周縁部の水田区にまで及び、運土という形で集落面積の拡張が行われている。この際、既に施行されている条里の小区画畦畔が、集落内における境界域を示す意味合いを備えたため、標高差をもちながら同じ位置に存在することとなったのであろう。



第16図 頭戸遺跡調査地位置図

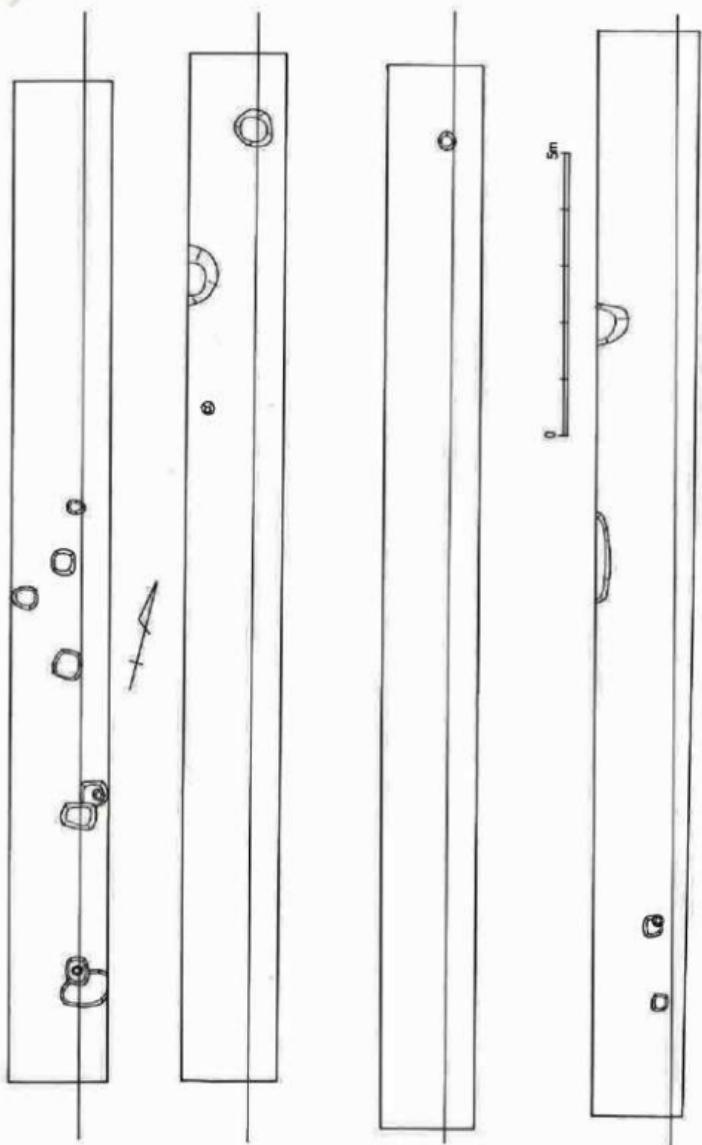
第6章 頭戸遺跡の調査（頭戸遺跡第2次調査）

（1）調査以前に知られたこと

頭戸遺跡は、先の高溝遺跡同様に昭和61年度に発掘調査例（第1次調査）のある遺跡である。この遺跡は、高溝遺跡・長門寺遺跡・正光寺遺跡と共に広義の「頭戸遺跡群」に該当し、古墳時代の環濠集落跡上に条里が施行されたことを共通の性格としている。

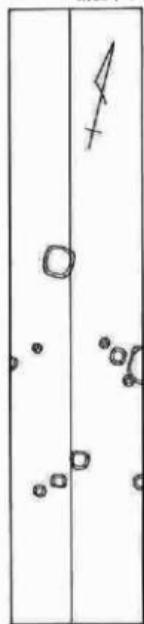
第1次調査では、西方の三反田地区を中心として古墳時代の環濠集落が確認され、ここで検出された環濠については、遺跡の環濠の西側と判断される。環濠の周辺部には古墳時代の掘立柱建物も構築されており、コンパクトな状態の遺跡として理解される。

また、大井A地区・大井B地区・茶屋町地区と東側の標高の高い側に以降するにつれ、新しい時期の遺構が存在し、茶屋町地区に至っては、全体が平安時代後期の遺構で構成されている。

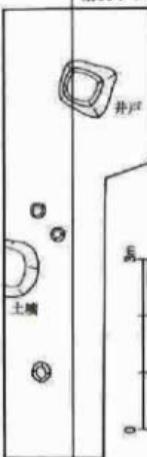


第17図 第1トレンチ～第4トレンチ平面図

第15トレンチ



第16トレンチ



(2) 調査の結果

第2次調査では調査区を12分割し、北側から順に第1トレンチ～第12トレンチと名付けた。

第1トレンチでは、掘立柱建物を構成する柱穴が確認された。この遺構は第1次調査大井B地区検出遺構に続くものと判断される。

第2トレンチ～第4トレンチでは、既に遺構面までの削平工事が昭和61年度に実施されており、遺構の遺存状況が極めて悪い状況であった。

第15トレンチでは、細かい柱穴群が検出され、第16トレンチでは、井戸および土壤を検出した。井戸は、上方が方形プランを呈しており、約1m四方の掘り方をもち、内部に隅丸方形の井筒跡を残している。井戸は、深さ約80cmを測る。また土壤は、直径1m20cm前後を測り、深さ60cmの規模を測る。

第7トレンチでは、竪穴住居とそれに平行する溝が確認された。竪穴住居は、一辺7m前後の方形プランを呈しており、2箇所の主柱穴を検出している。壁高約18cmを測り、上方の削平行行為が予想される。實際には、壁溝等の施設が認められず、炉およびカマド等の厨房施設も確認されなかった。

住居の南西側で確認された溝は、幅20cm・深さ15cmを測り住居に平行して構築されたようである。

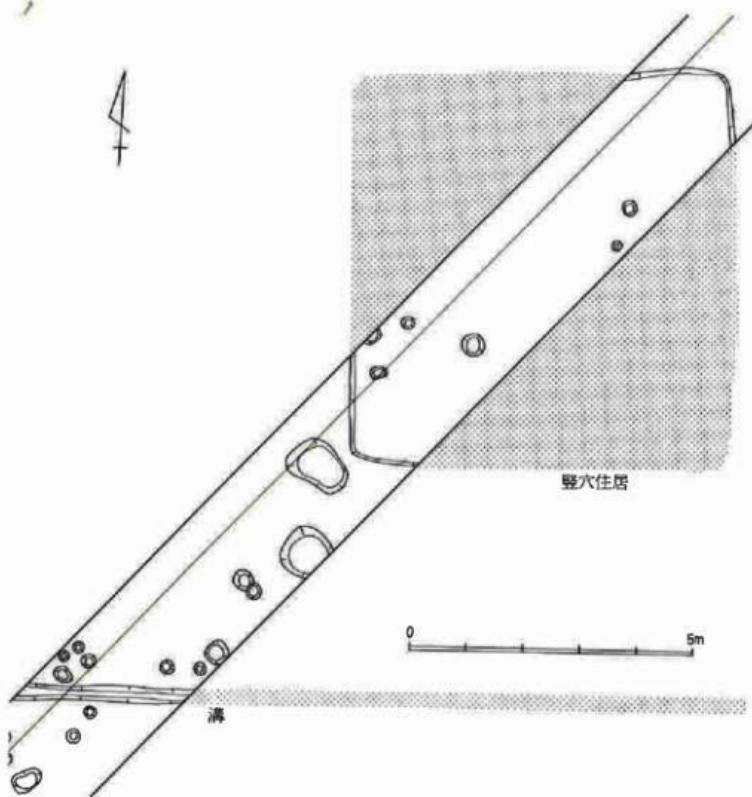
住居周辺に構築された土壤については、性格が不明である。

第10トレンチでは、幅6m・深さ140cmを測る大溝遺構を検出した。これについては、第1次調査三反田地区で検出された環濠に類似した遺構と推測されるが、調査地区的規模に限度があり、決定づける根拠は無い。

大溝遺構の南西側には、遺構が集中的に存在するが、性格や時期の明らかな物はない。この他にも各トレンチで遺構が確認されているが、遺物を出土し、時期や性格の明らかなものは少ない。

次に顔戸遺跡第2次調査において出土した遺物について説明を加える。今回の調査で出土した遺物は、第22図に掲げた

第18図 第5トレンチ・
第6トレンチ平面図

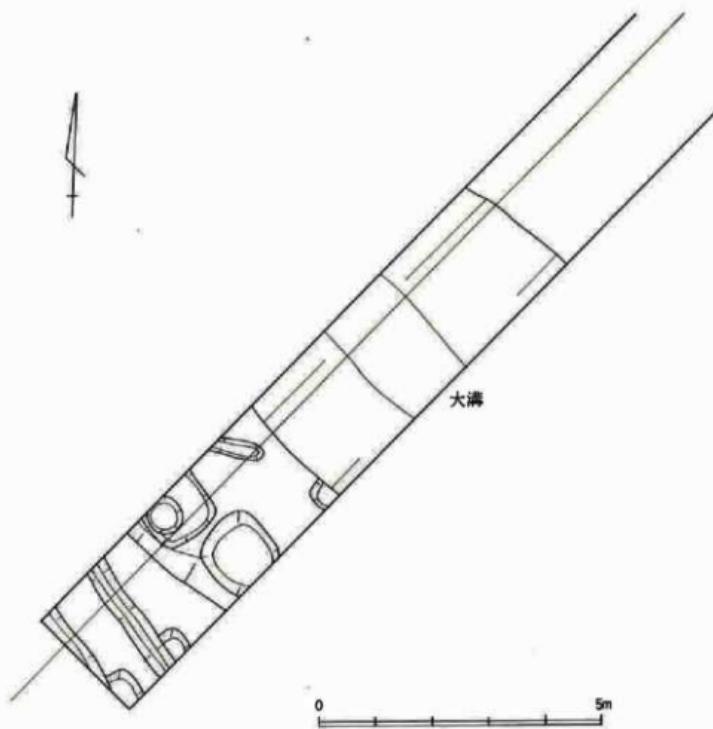


第19図 第7トレンチ検出遺構

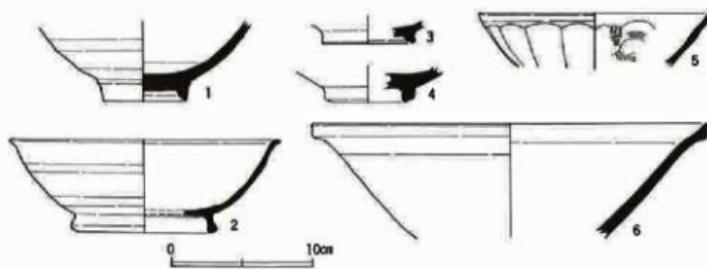
ものである。このうち第10トレンチの大溝遺構から出土した遺物には次のものがある(74~83・96・97)。

(74) は突帯文を持つ土器で、淡赤褐色呈し、内面に円形の刺突文を巡らせている。

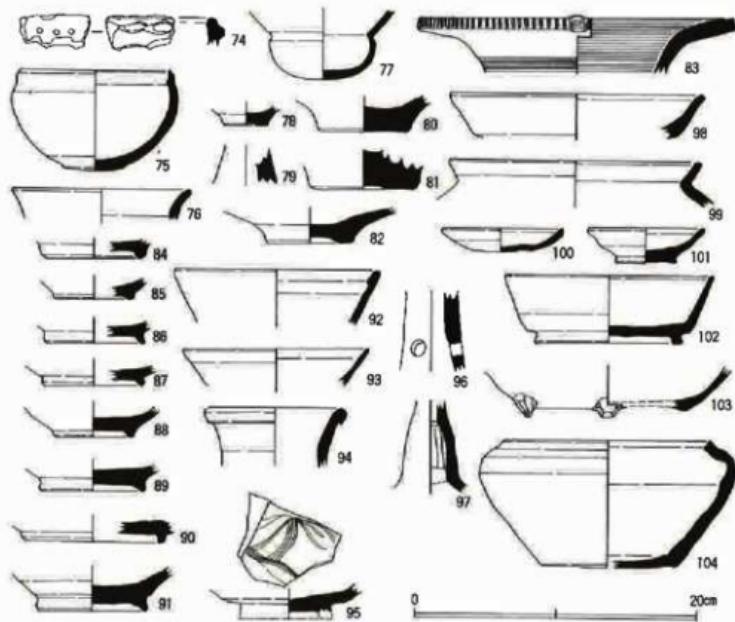
(75) は口径10.4cm・器高7.2cmを測る椀。口縁上端部が鋭く終えられ、わずかに水平気味の底部が伴う。(76) は口縁部の外反する甕。(77) は小形丸底壺。(78・80・81・82) は底部。(79・96・97) は高杯の脚柱部。(83) は外反する口縁部をもつ壺である。頸部外面には、描直線文をもつ。また口縁上端部には工具を用いた刺突列点文と指頭圧の痕跡が残る。



第20図 第10トレンチ平面図



第21図 法勝寺遺跡出土遺物



第222図 須戸遺跡出土遺物

これら大溝遺構から出土した遺物には、縄文時代晚期・弥生時代中期・布留式土器併行期の土器が混在している。

次に第12トレンチの土壙内から出土した土器には、輸入陶磁器(95)と越前焼の鉢(104)がある。(95)の青磁は、見込の内面に刷毛様の工具で書かれた陰刻が残される。また、(104)の鉢は、きつくる内湾する口縁部と、わずかに張りでた平底の底部を伴う。

この他に各トレンチの包含層より、灰釉陶器(84~91)・土師器(92・93)・陶器の壺(94)・土師器の小皿(100)・山茶碗の小皿(101)・須恵器の杯(102)・足を伴った陶器の鉢(103)などがある。

これらの遺物には、平安時代中期から後期に至る磁器の遺物が多く含まれており、周辺における条里開発の時期をさぐる一つの手がかりとして使用されている。この周辺の同時期の遺物としては、戸戸遺跡・高溝遺跡の北側に隣接する法勝寺遺跡の出土遺物がある(第21図参照)。(1~4)は灰釉陶器の壺である。(1)は体部外面下半部にヘラ削りを残し、高台の内面に段を持つ。(2)は内窓気味に立ち上がる口縁部が、上端で外方に屈折する特徴とする。(5)は輸入陶磁器で、青磁壺である。(6)は須恵器の鉢で、玉縁状

の口縁部を特徴とする。

いずれも近江町の平安時代を代表する標準的な遺物である。

(3) 調査から理解できたこと

顔戸遺跡については、これまでの調査によって古墳時代の環濠集落と平安時代の条里開発期の集落遺跡であることが理解されていた。今回の調査では、従来その実態が不明であった遺跡周知範囲の最南端部の状況を明らかにすることができた。

顔戸遺跡では、古墳時代の遺構の中心が、第1次調査の三反田地区にあることは明白で、以前に検出された環濠遺構が、今回確認された大溝遺構とともに古墳時代集落を取り巻くことが予想される。前回の調査では、明確な住居遺構として据立柱建物のみが確認されていたが、今回竪穴住居が確認されたことで、古墳時代集落の拡がりが当初の予測より南南西に伸びており、これを取り巻くような環濠の存在が予測される。

また、条里の普及とともに形成される平安時代の集落遺跡についても、遺跡周知範囲の北東部に集中しているとされてきたが、これに後出する中世の遺構の存在が、遺跡南端部に認められた。これら中世の遺構に伴う遺物としては、輸入陶磁器と越前焼の組合せが認められ、湖北地域における中世土器の編年作業に今後役立つものと思われる。



第23図 塚の越古墳調査地位置図

第7章 塚の越古墳の調査（塚の越古墳第2次調査）

（1）調査以前に知られたこと

塚の越古墳は、既に墳丘の覆土の多くを造しているものの、平野に位置するに前方後円墳として旧来周知されてきた古墳である。この古墳については、平成元年度に周辺周濠域の調査が実施され、周知されているよりも一周り大きな古墳であることが明らかになった。

同古墳は、後円部を東側に向けており、第1次調査のおりに、周濠内における葺石の存在が明らかになり、現在東側に隣接する北陸自動車道の側道下にもこの古墳の粒がりが予想されるに至った。第1次調査では、この古墳は6世紀の初頭に築造されたもので、横大

式石室導入期の古墳と理解される。古墳の周縁部には、一定間隔を保ちながら石見型埴輪が巡っており、同時に木製の埴輪列が存在したことが、小柱穴の列から予想されている。また、このほかに鶏形埴輪・家形埴輪・馬形埴輪・盾形埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪の出土が認められている。

(2) 調査の結果

工事に並行して2日間のみ実施した調査では、限られた調査範囲の中で、古墳の基底部を検出することに成功した。葺石は、古墳の南側で4~5段重なった状態で確認されたが、第1次調査の結果同様に、南側と北側で構造差が認められる。なお、この遺構については、北陸自動車道側道の掘削という悪状況の調査のため、検出した当日に崩壊した。

(3) 調査から理解できたこと

塚の越古墳については、旧来周濠の有無が判明しない状態であったが、これについては第1次調査の際にその存在が実証されている。後円部側の周濠の拡がりは、北陸自動車道の中央部分にまで及んでおり、良好な状態で側道下に残されていた。

また側面観を重視した古墳の構築は、横穴式石室導入期の古墳構造を知る上で、極めて重要な問題とされよう。

第8章 まとめ

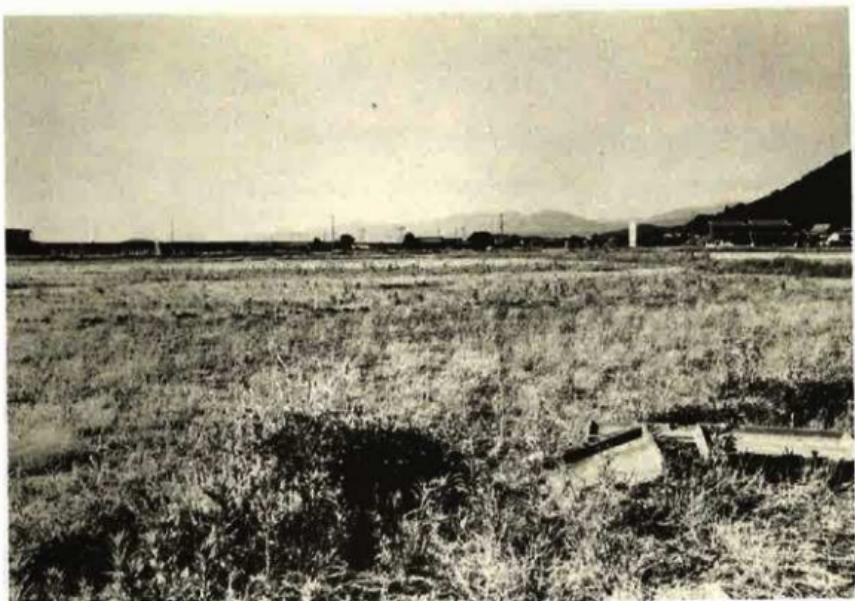
今回の調査では、埋塚遺跡の他に、淨蓮寺遺跡・高溝遺跡・顛戸遺跡・塚の越古墳を取り扱った。埋塚遺跡については同遺跡第III期の古墳（或いは低墳丘墓）の存在について断定できる要素は少なく、今後の調査に委ねられた。また淨蓮寺遺跡については、寺院を中心とした中世集落の存在が明らかになった。

高溝遺跡・顛戸遺跡については、条里開発による平安時代以降の集落遺跡の構成が明らかになった。また塚の越古墳については、後円部規模を明らかにすることができた。

これらの少しづつの調査成果の蓄積は、近江町の地域史解明の一助となり、やがて明白な歴史解明の根拠を構成するものとなろう。

文末になったが、発掘調査および整理調査に際して、御協力をいただいた関係者・関係諸機関謝意を表する次第である。

図 版



埋塚遺跡調査前状況



埋塚遺跡調査風景



埋塚遺跡第1トレンチ



埋塚遺跡第4トレンチ



淨蓮寺遺跡全景



淨蓮寺遺跡檢出遺構



高溝道路挖出条里吐畔造構



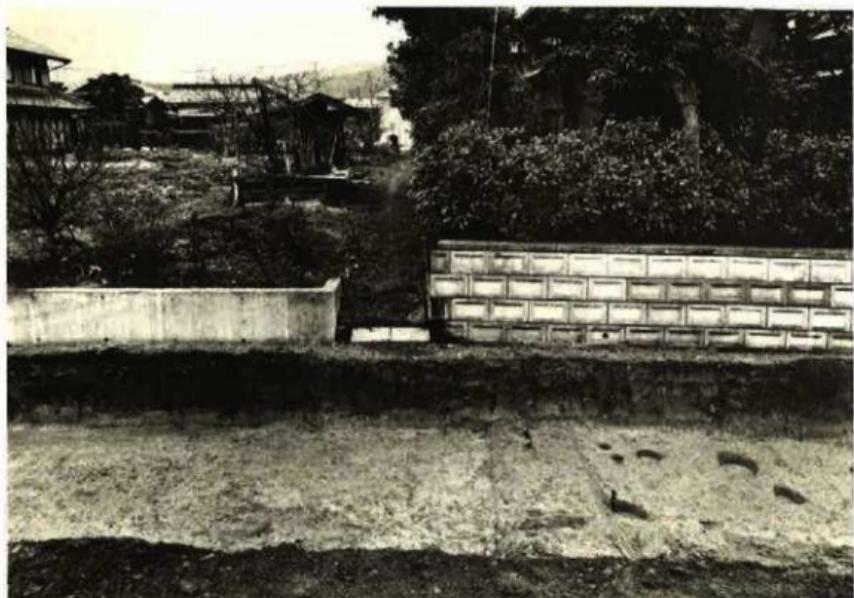
高溝道路条里咗畔遺構



高溝道路条里咗畔斷面



高溝遺跡条里小畦畔



高溝遺跡小畦畔と里道



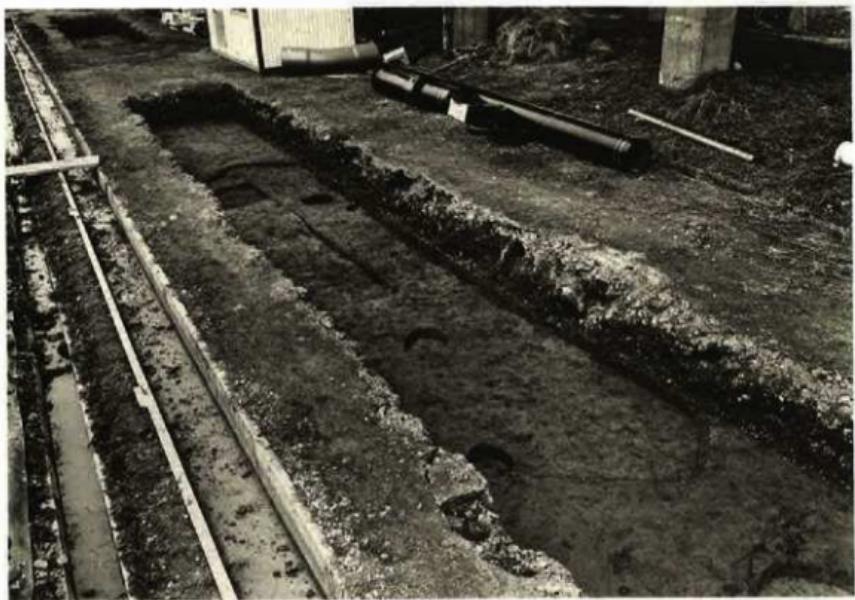
高溝遺跡検出遺構



顏子遺跡全景



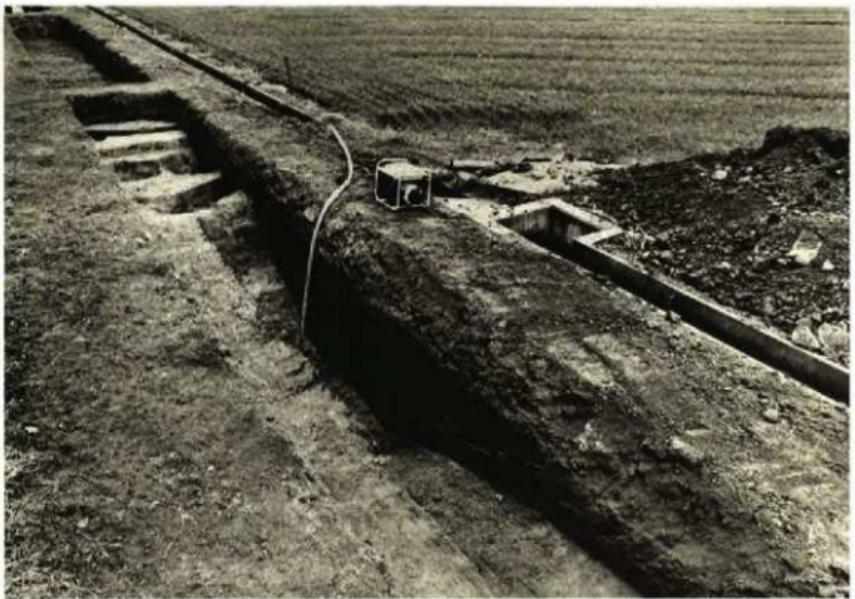
顏子遺跡近景



南洋遺跡竪穴住居



南洋遺跡竪穴柱建物



魚戶遺跡大溝



魚戶遺跡大溝斷面



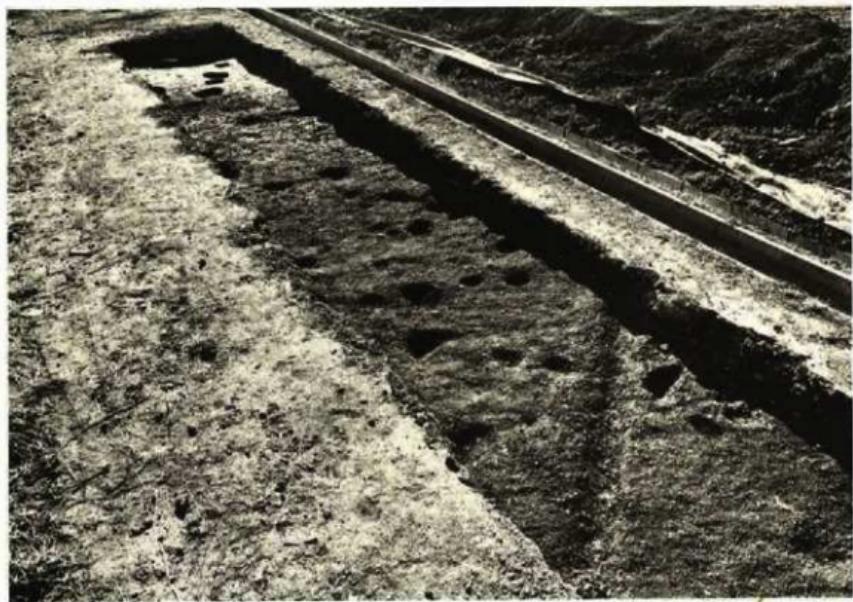
顕戸遺跡第12トレンチ



顕戸遺跡土壙



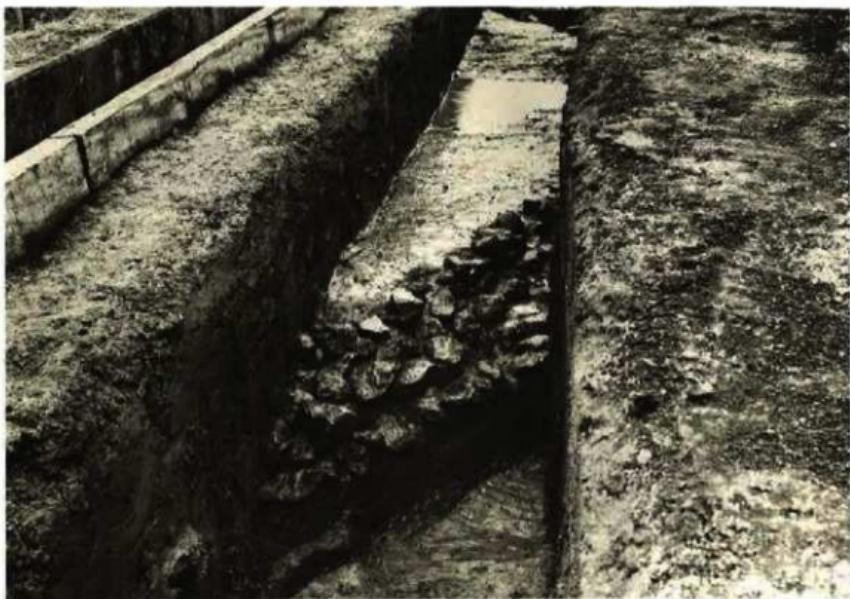
函戸遺跡第1トレンチ



函戸遺跡第9トレンチ



塚の越古墳検出遺構



塚の越古墳南面



塚の越古墳北面



1



1



15



10



11



5



105



6



16

17



106

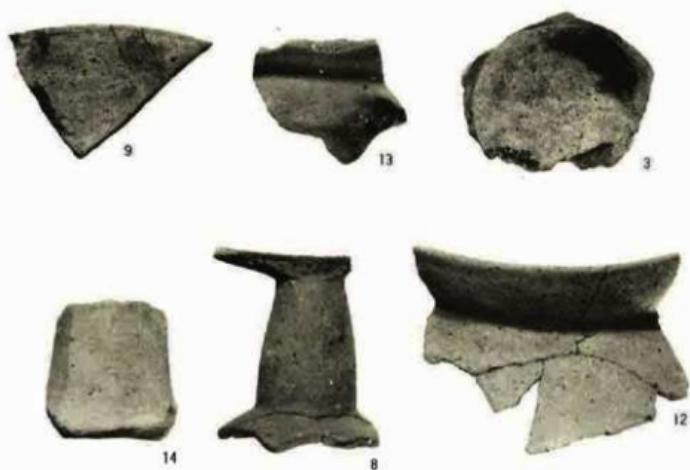
107



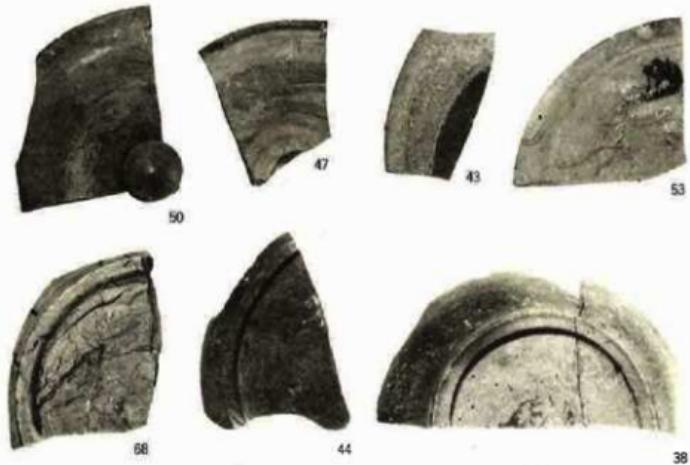
108

109

埋塚遺跡・高溝遺跡出土遺物



埋塚遺跡出土遺物



高溝遺跡出土遺物



24



20



22

30



23

25



31



110



21



27



18



26



112



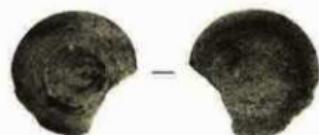
113



19



114



101



88



89



91



—



75



98



115



83



82

近江町文化財調査報告書第8集

埋 塚 遺 跡

1991年3月

編 著 滋賀県坂田郡近江町教育委員会

印 刷 有限会社 真陽社